文献に見られる日本における図書館利用教育の歩み

丸　本　郁　子

Ikuko Marumoto: The Development of Library Instruction in Japan since 1945 with Bibliography

I　は　じ　め　に

図書館の活動を一言でまとめれば，利用者の必要とする資料を提供することに尽きる。それを支える諸活動の一つとして図書館の利用教育という指導的機能があり，その重要性が近年クローズアップされてきた。これは図書館の資料提供機能が向上しているにもかかわらず，それらが充分に活用されていないという反省の上にたつ。それは丁度，どんなに良い病院や医療施設があっても，それが役立つことを地域住民が知らず利用されなければ，宝の持ちぐされとなるようなものだ。

この文の目的は戦後から現在にいたるまでの，わが国で行なわれた図書館利用教育に関する文献の主なリストを作成すること，と同時にそれらを概観し利用教育の実践や研究がどのようになされてきたかを辿ることにある。

利用教育とはこの場合，オリエンテーションから文献利用指導レベルまでを指すが，館種によっては広い意味のパブリシティーも含めざるを得なかった。対象文献のタイプは，理論，歴史，紹介記事，実施記録，指導案，実態調査，研修・教材作成記録などである。利用者向けの図書もリストアップしたが，生徒用テキストや自館作成のガイドブックは数例をあげるのみに止めた。また各専門分野の文献調査ガイド類（例「化学文献の調べ方」「音楽教育文献の探索法」「法学文献の…」など）は除外した。

文献リスト作成のために用いた主な参考資料は以下のものである。

・多田二郎他『図書館学文献目録』日本私立大学協会　1971。

・深井人詩・目黒聰子共編『図書館学研究文献要覧1970-1981』（20世紀文献要覧大系12）日外アソシューツ　1983。―学校図書館関係は紙数の関係で〈利用指導〉の項のもののみを含めたが，本来は〈授業・教材〉のもとの文献も

当然含めるべきである。

・国立国会図書館『雑誌記事索引—人文社会編累積索引版』1948-1954年版，1955-1964年版，1965-1969年版，1970-1974年版，1975-1979年版。この索引は年度により項目が異なるので，可能な限り原文献に当りチェックをしたが，関連の少ないものも含まれているかもしれない。

・図書館科学会『全国短期大学紀要論文索引　1950-1979』埼玉福祉会　1980。

・菅原春雄　情報処理教育の課題『文教大学女子短期大学部研究紀要』24：11-20，1980。

・椎葉敏子他『図書館利用教育関連文献 1945-1982』昭和57年度全国図書館大会短大分科会配布資料。

・図書館関係雑誌記事索引　『図書館雑誌』

Ⅱ　学校図書館

ことば　学校図書館界では利用教育を表わすのに「学校図書館の利用指導」という表現がほぼ定着している。戦後しばらく「図書館教育」という語が用いられていたが，[62] 文部省の昭和36年『小・中学校における学校図書館利用の手びき[6]』で「利用指導」と言う語が提唱され，この語が広く用いられるようになってきた。「読書指導」と言うことばとどの様に関係するのか混乱した時期もあったが，[35][37] 北嶋らは「どちらかといえば，人間形成ないしは教養・趣味・時にはレクリェーション的な面が主となる」ものを読書指導と呼び，「ある特定事項についての知識・事実・データを入手することが主となる場合」に利用指導を用いると区別している。[20]

学校図書館ではレファレンスと利用指導は別の分野としている。[23] 一定の計画のもとに行なわれる教育活動を利用指導とし，個人または小グループ対象で，利用者の求めに応じ具体的な情報・資料を提供する奉仕的面の強い活動をレファレンスとしている。

利用指導の定義を全国学校図書館協議会（全国ＳＬＡ）は「児童生徒に図書館および資料の利用法を習得させることにより，主体的に学習する能力を育成する指導[23]」としている。それは単に図書館や資料についての知識を得させるだけでなく，学習の方法を学ばせる「学び方の教育」とされている。

変遷　学校図書館界の利用指導に対する関心は，戦後の学校図書館スタートの時から高い。文献に見る指導カリキュラムや実践例は数えきれない。しかし現場での実施状況は，はかばかしくない。それは日本の教育の体質が図書館の働きを重視してこなかった状況を反映している。利用指導の思想の普及も，最初は文部省が中心となり熱心であった時期もあったのだが，最近はその地位をＳＬＡなどに譲っているようだ。

昭和20年代　戦後の日本の学校へ利用教育の思想が浸透していった様子は，加賀，[33]阪本，[62]深川[63][66]論文に詳しい。利用教育を最初にとりあげた発言は，昭和23年文部省の「学校図書館の手引[1]」である。この本が新教育への改革のなかで，日本の教育史上始めて学校図書館をカリキュラム上に意義づけをしたのであるが，実際にはまだそれほど重視していない。わずかにＡＬＡの Education Committee の指導案[1]とその他２，３の実例をあげている程度である。

ひき続き天理大学[3]や図書館教育研究会[4]などから図書館教育をとりあげた文献が出されているが，それらも Fargo [2] や Douglas [3] などが米国で作成した案をもとにしたものであった。しかし従来の教科書中心の教育から脱し，図書館の資料を活用する新しい教育へと移るという理想が熱っぽく語られている。生活単元主義の流行で，コア・カリキュラムとして学習を展開していこうと言う動きが盛んであったから，図書館の利用も重視される傾向にあった。

現場での実践は文部省や地方教育委員会の指定校で熱心に行なわれた。その成果が東京第一師範学校附属小学校による『小学校の図書館教育[2]』や，『改訂版長野県カリキュラム試案1950国語篇』（長野県教育委員会）である。それらには，アメリカ直輸入のものから脱して独自のものを作ろうという意気込みが見えるが，ともすれば盛り沢山な案で，日本の子どもの状態からは離れていると加賀は指摘している。[33]

当時は「図書館教育」と言うことばが共通に用いられていた。この時期からすでに，指導のためにライブラリー・アワーと称した時間を特設した方が良いという考えのグループ[3]と，各教科単元内に指導事項を融合して取り扱うべきだというグリープ[4]の二つの案が並列していた。[62]

この時期の論文は，ほとんどが理論的，啓蒙的なもので，こうありたいというプランが主体となっている。

昭和30年代　20年代の生活単元主義への反省から，系統学習が強調された

時代で，学校図書館活動は後退する。昭和33年の小・中学校学習指導要領の改訂は利用指導について特に規定はしていない。しかし総授業時間数を国が厳しく規制することになったので，図書館の時間を特設していた学校は，それがとりにくくなり，とり止める所も出てきた。[63]

文部省は34年の『学校図書館運営の手びき[5]』，36年の『小・中学校における学校図書館利用の手びき[6]』を始め，38年，[7] 39年[8][9]と次々に学校図書館の手びき書を刊行している。それらには利用指導の領域，体系表，各地の学校や教育委員会作成の指導計画表などがモデル・プランとして載せられている。鳥越はそれらの手引き書を，見事にまとまってはいるが，現状とのズレがあり過ぎると批判している。[53]

『学校図書館』誌上にはいくつかの実践記録が現れる。全校をあげての取り組み，[39] オリエンテーション計画，[43] 小学校，[45] 中学校，[46] 高校[45]などである。小学校レベルでは学級担任が各教科の授業中に図書館の利用指導を自然に組み込むプログラムが良いと言われ，中学・高校と学年が進むにつれ，特設時間がとりにくいので，新入学時のオリエンテーションや，国語の授業に組み込む工夫がなされている。研究会を行うため，カリキュラム作りはしたが，ひき続いての実行が伴なわないとの反省もある。[57] これらのカリキュラムも，ともすれば全国ＳＬＡ案の引用が多い。

阪本は，日本で作られる案は， Fargo らのものと比べ指導事項が広範囲過ぎる点を指摘し，[51] 原因は日本ではまず図書館の存在意義を説くことから始めねばならないからであろうと言う。

生徒用のテキストの作成も，兵庫県，[138][139] 長野県，[140][141] 東京都[142]などで 行なわれている。 全国ＳＬＡは昭和30年にカラースライド『図書館教育シリーズ』全７巻を刊行した。

昭和40年代　43年の小学校学習指導要領改訂により読書指導の大切さが言われ，40年代は読書指導ブームである。指導要領第４章において，利用指導は特別活動の学級指導の部分に位置付けされた。ひき続き文部省は45年小学校に，[12] 47年中学校[15]に手引き書を出している。情報化時代という言葉が使われ出し，それに対処するための情報処理能力を育てようという取りあげ方がなされている。

全国ＳＬＡは40年に利用指導委員会を発足させ，カリキュラムの検討を行い，46年に『学校図書館の利用指導の計画と方法[13]』をまとめた。義務教育の９

ケ年をカバーした案である。『学校図書館』誌は，44年5月号，[63] 46年4月号，[72] 49年5月号[93]にそれぞれ利用指導の特集号を組んでいる。44年には文部省の手びきの解説を始め，全国ＳＬＡ案の説明や学習指導領内で何をなすべきかなどと理論的なものが多い。46年度は，実践例が多く，ワークシートを用いて生徒に定着させた例，教科内の指導，特設時間の持ち方などで，困難な状況の中で努力している姿が読みとれる。49年度特集は，一部の進んでいる地を除くと大多数の学校では指導が低迷している状態をふまえ，改めて利用教育の本質を考えなおしている文が多い。

北嶋と小山は全国規模で小，[80] 中，[87] 高[96]の各レベルで利用教育の実態調査をしている。利用教育の実施率は，小78％，中47％，高71％と一見普及しているようであるが，その行われている内容を質的に検討すると，多くの問題があることが分る。共通の問題点として，時間が取れない，学校内に図書館に対する理解がない，指導をする人がいない，適切な教材がない，などがあげられている。その原因・対策は，笠原[93] 遠藤[94]らも論じているが，その後50年代にもなお言われ続けているものと変りがないので後でまとめて論ずる。

昭和50年代　全国ＳＬＡを始め各団体の絶えざる働きかけの成果として，50年代において利用指導は学習指導要領上に明文化された。小学校55年，中学校56年，高等学校56年実施の改訂で，利用指導は特別活動の学級指導で扱われるべき事項と位置づけられた。

利用指導の領域設定と体系表は，全国ＳＬＡが昭和57年に『自学能力を高める学校図書館の利用指導[23]』として，また文部省は58年に『小学校・中学校における学校図書館の利用と指導[27]』として発表した。

両案とも生涯学習の重要性を強調し，利用教育とは主体的な学習能力を育てるものとしている。指導方法も，一方的に図書館側から技能の伝達をするのではなく，生徒側の内発的動機を大切にすべきと言う。したがって，両案とも内容が以前より整理され，項目が少くなると共に，調査研究のまとめ方などに重点が置かれている。系統的な指導計画をたてることの重要性と同時に，教科や行事などの活動と融合した形の指導が効果的としている。

文部省案はそのタイトルに「……利用と指導」となっているように，従来のものとニュアンスがいくらか異る。「図書館は情報を処理するためだけに利用されるのではない」として，「狭義の利用指導」だけでなく読書指導をも含んだ形の体系となっている。全国ＳＬＡ案は読書指導と融合した展開例も含め

てはいるが，一応読書指導は「独自の領域であり別々に論ぜられ研究されるべきもの」としている。

この二書を始めとして，50年代は教師に向けた利用教育の手引きが数多くまとめられた。[20)22)26)] 学校図書館活動全般を扱った本の中の利用指導の項目にも，単行書と同様，力作が多い。[19)24)28)] 今までに積み重ねられてきた実践と研究が花開いたと言える。理念，指導内容，授業計画のたて方，具体的展開例，教具，教材，評価法などに渡ってまとめられている。大学図書館界の文献類と比較するとき，学校図書館界におけるこの面の研究の歴史の厚みが感じられる。

実践の記録は40年代後半から数を増す。特設時間を設ける方が，教科やその他の活動に融合させての指導より多いが，増田はそれを「伝統的な教科書中心の教授法がとられている限り，図書館資料を使って指導する場面がない[26)]」からだとしている。とかく形式的になりやすい特設時間であるが，目的意識のある司書教諭の存在により素晴しい展開を見せる例もある。[126)] しかし精彩を発しているのは融合案に多い。[112)113)] 指導法も除々に成熟を示し，従来の資料中心のものから，調べる側の生徒の発想の流れを大切にした形へと移っている。[135)]

生徒用テキストも『学び方の技術[146)]』を始め，各地で作られている。昭和20・30年代のテキストについては芦谷論文[72)]がくわしく，最近作られたテキストの一覧は小山[24)]がまとめている。『学校図書館』誌348号[121)]は「利用指導テキストとその活用」という特集を組み使用実践例を載せている。

生徒用テキストの内容を調べると，説明文がいかにも多い。このようなテキストを用いて，またもう一つの詰め込み教育が図書館の名においてなされてはならないと思う。全国ＳＬＡは生徒が自分で動き発見しながら学べる教材としてワークブックを開発中という。[124)]

メディアの多様化に共ない，ＡＶ教材にも関心が寄せられ，実践例をふまえた「ＡＶ教材を使った利用指導」の特集が『学校図書館』誌322号[116)]で組まれている。

教材作りの動きのなかで注目すべきものは，生徒がひとりで学べる手段の開発である。高橋はゲームの形をとるものを種々工夫し発表している。[131)] 古賀らはカードを用いたプログラム学習[123)]やコンピュータ学習[132)]を試作している。もともと図書館の機能の一つは学習の個別化にある。とかく一斉指導を

せねばならないという発想で固まりがちな中で，村上[124]や古賀[123]らが提示している疑問は示唆的だ。時間が不足するなら授業に組み込まなくとも，必要な時に生徒が楽しみながら利用法を身につけられるものを作り出したら良いと言う方向は，行き詰っている現場に一つの突発口を与えてくれる。

利用指導の各プロセスを分析しプログラム化する考えは，すでに40年代に出され実践もされている。[58][59]今はそれをＣＡＩとして活用する時だろう。

全国レベルの実態調査は，全国ＳＬＡが昭和56年に，北嶋らが57年[130]に行っている。利用指導の普及率は10年前に比べ，量的には進展が認められる。集会のテーマに利用指導がとりあげられ参加者も多い。新たな利用指導のブームが起っているとも言えよう。

しかし克服しなければならない問題は多い。利用教育をまともに展開するには，なによりもまず「学校図書館が使うに値する図書館であることが前提[23]」となる。 そうなるためには，教師たちがそのような図書館が必要だと気付かねばならない。具体的には北嶋らが提案するごとく，[96]教師養成の大学においてカリキュラムの改善をし，すべての大学生に図書館利用に対する理解と力をつけることが第一歩だ。司書教諭養成カリキュラムの利用指導の内容も充実させねばならない。現職の教師および図書館員の資質の向上も図らねばならない。遠藤はそれにはまず「イメージを与え」「柔軟な頭脳を作る」ことだと言う。[94]イメージがあれば，大切なものとそうでないものとの区別がつく。過去の文献を見ると，柔軟な頭で対応するとき，新しい方向が切り開かれてきたことが分る。

佐野は「われわれは自らの体質を変えねばならない」と説く[23]。「ともすれば学習指導要領に書かれたから盛んになるという体質である。つまり裏がえせば,書かれなければやらないという体質にほかならない。それは自ら学ぶ方法を学ばせるという利用指導の目的とまるで反対の体質である」と言う。ここで言われていることは，乗り越えるべき問題は今迄もあったし，これからも存在する。しかし主体的に学ぶことを伝えるつもりなら，自らが困難な状況を乗り越える方法を探るべきだというチャレンジであろう。

Ⅲ　大学図書館

ことば　大学図書館界において利用教育はまだ共通理解を得ていることばと

方法論をもたない。しかしいくつかのパターンはある。まず大きく二つに分けて，新入生対象の図書館紹介を目的とするオリエンテーションと呼ばれているものと，第2段階の資料の利用法を教えるものとがある。この文で主として論ずるのは後者であり，文献利用指導，文献検索指導，文献検索ガイダンス，又は単にオリエンテーションと言う語を同様に用いている例もある。[189)]

オリエンテーションは図書館の存在・意義また施設・サービス・手続きなどを知らせ，利用しようと言う意欲を引き起すことを目的とする。これを利用教育（library instruction）には含めないと言う説[194)]もあるが，大方はこれを利用教育の第一ステップとしている。

文献利用指導は二つのレベルがあり，学部学生の1，2年生対象の一般的初歩的な書誌利用指導と，3，4年生または大学院生対象の専門分野にわたる指導（bibliographic mstruction）とがある。カリキュラムに関連して言えば，非公式に図書館員が単位を与えない形で行うものと，公式に主として教員が教科として行うものとに分れる。方法で分けると，グループを対象に授業形体で教える場合と，個人が必要な時に援助を与える形とがある。後者はまたレファレンス・サービスの一つとして，直接図書館員から受けるカウンセリングやガイダンスと呼ばれているものと，各種メディアを利用した独習プログラムや印刷物・提示などに分けられる。

利用指導と利用教育と言う言葉の使い分けであるが，長沢は特に区別しないと言い，[247)]椎葉は教科として包括的・体系的に扱うものに対して「教育」を用い，一部を断片的に図書館などで行うものを「指導」と呼ぶ[242)]と区別している。この文においては両者を特に区別しないで用いる。

変遷

昭和20・30年代　学校図書館とくらべ大学図書館において利用教育の必要性に気付くのは，かなり遅い。大多数の大学図書館は「特に何もしないか，館の入口等に利用法を解説掲示しておく[148)]」程度であり，いくつかの館がオリエンテーションを新入生に対して行い始めたに過ぎない。

しかし必要がある場での対応は早く，文献調査が不可欠な薬学系の大学では，すでに戦前から指導が行なわれていたという。[163)]昭和20年代には，この道のパイオニアである村上清造や中沢浩一[152)]らが本格的に授業形態で，3，4年生に対し「薬学図書解題」また「有機化学文献の調べ方」などという名称でbibliographic instruction を行っている。学生向きの教科書も『有機化学文献

の調べ方』や『薬学文献学』などが作られた。

当時の論文中にはすでに現在なお言われ続けている図書館利用教育の意義と問題点が，ほぼ余すところなく論ぜられている。学生は図書館を利用しないこと；その原因は教師の教育に対する意識や教授法にあること；大学レベルの教育で大切なことは，学生が自ら学ぶ力をつけることである点；利用指導を行ってもニードの自覚が乏しい低学年の学生には効果がないこと；利用教育を定着させるには講義形式のみでは不充分で，実習が不可欠であることなどである。

昭和40年代　薬学系と同様ニードの高い医学系の大学においても，昭和39年に奈良県立医大の図書館員によって指導が始められた。[158]）研究者の文献利用形体の調査が行なわれ，学生時代になされた利用指導に効果があることを証明している。吉本は利用教育は図書館員自身が当然行なわねばならない役割であると言い同時に，それを通して医学図書館員の地位をプロフェッションとして高めたいと述べている。44年に東京女子医大で授業時間を用いての指導が始められた。[162]）

『薬学図書館』誌上では特集が組まれ，各薬科大学で行なわれている指導法の情報交換がされている。[163)166)167)169)]

石川の論文[155]）は琉球大学での調査を踏まえ，Brascomb[4] を引用し，教師中心授業の危険性を指摘している。学生の個人差の無視；観点の異なる文献の紹介を怠り，一方的に教師の主観を押しつけること；完結した知識を教師が与えるので，学生は自分で知識を体系化する必要がなく，自主的な研究態度を身につけなくなることなどである。

学校図書館界で利用教育を提唱し続けている北嶋は大学レベルにおける指導計画案を体系化して示した。[171]）また利用教育をカリキュラム中に位置づけ科目化する方法については，大学設置基準が科目の設定を大学自身の自由裁量にまかしている点に言及し，それは大学の決断があれば可能であると指摘している。

昭和50年代　50年代に入ると人文・社会科学系の大学においても指導が開始され，報告や実態調査の数が増してくる。このような利用教育への関心の高まりには次のような理由があげられている。まず情報量の増大に伴ない，一次資料のみならず検索ツールとしての二次資料が多様化し，図書館は簡単に使える場ではなくなってきた。同時に高等教育の大衆化が進み，大学生であっても初歩的な図書館の利用法を知らない者が急増した。大学図書館外の人たち――公

共図書館や国立国会図書館――から，学生が基本的なツールの用法を知らないどころか自館にある資料まで外部に求めている状態で，これは大学図書館側の怠慢であるとの手厳しい批判も出てきた。[5] また大学紛争後の大学全体の見直しの中で，図書館自身も学生のニーズに応える学習図書館へ移る必要を自覚し，その一方法として利用教育の重要性が気付かれてきた面[6] もある。

学会・研究会でも実践報告が出され，利用教育をテーマとする集会が持たれるようになった。短期大学での取り組みも始まる。東京私立短期大学協会は53年と55年に利用教育をテーマとし，日本私立短期大学協会は53年，54年ととりあげ，その後も分科会で扱っている。日本図書館協会短大部会は53年，55年，57年，58年と利用教育をテーマとしている。日本図書館研究会は57年に扱っている。

実態調査は52年，日本私立短期大学協会が会員校を対象に行っている。[179] オリエンテーションは99％の館で実施されているが，その先の指導は大部分が印刷物やレファレンスによるものである。6年後，58年に同協会が図書館担当者研修会のために行った調査[236] によると利用教育に相当する科目があると答えている数は14％となっている。ただしその半数は司書コースの関連科目である。高専は58年度全国図書館大会への調査[244] では5％が教科に組み入れた形の利用指導をしている。

4年制大学に関する調査は52年，私立大学図書館協議会東地区部会研究部が国公私立大学と短大5校を含めた調査を行った。[192] オリエンテーションは85.7％の館で行っているが,その先の指導は13.4％（45館）が実施している。短大に比べ4年制大学は6年ほど先行していることになる。

その普及に伴ない入学時に行うオリエンテーションの効果に対して疑問も出された。[188] しかし長澤は「たとえ負担は重くとも……最初の手がかりを図書館側が与えるために……主体的に取り組むべきである[200]」とすすめている。効果を高める工夫も，ＡＶ機器の活用，[183][211][212][217][214] 図書館ツアー，[145] また印刷資料をユニークにするなど試み[199] られている。

図書館員が文献探索法の指導を非公式ではあるが授業形式で行う報告も増してきた。鳥取大学医学部，[178] 東京女子医大，[200] 岩手医科大学[205] を始め，国際基督教大学，[206] 名古屋学院，[188] 広島女子大，[173] 龍谷大学，[225] 国立音楽大学，[200][210] その他である。短大では白梅学園，[193] 立教女学院，[193] 東京女子大学短大部，[207][239] 高知学園短大，[225] 長崎県立女子短大，[243] 北

陸学院[241]その他であるが，学校側の理解と図書館員側に資格がある東洋英和[193]の例では，館員による指導が必修の科目とされている。

指導の内容，レベル，方法にはかなりの差が見られる。講義と演習を組み合せ10時間ほどかけて高学年生対象に行っている医学部系の例もある。[158]大学の教育プログラムの一環となり，一定時間がそのために割かれているものもある。[206][243]館員の働きかけでＰＲをし，理解ある教師のゼミや教科の時間を用いて，主題に合せた検索指導を行う協もある。[225][239]それが出来ない所では土曜の午後，[173]昼休み，[188]夏休み中[225]と空き時間を探して図書館独自のプログラムを組んでいる。秀れた例としては国立音楽大学図書館があり，[210]上に述べた各種の方法を使い分け，多角的に指導を行い効果をあげている。

効果の測定や評価も，まだ確立した方法はなく，直後にアンケートをしている例[173][178]はあるが，ほとんどは学生の利用形態の変化を観察したものである。プラス評価としては，一様に目録の利用増加，二次資料の活用，雑誌・紀要の利用増加，また図書館員に親しみを感じ気軽に相談をするようになったことなどがあげられている。館員が図書館サービス全体を利用者の観点で見なおす契機となる点も指摘されている。[189]

問題点としては，時間不足で「完全な技術の習得」をさせると言うより「図書館資料に方向づける[178]」ほどの効果しかない点，教員の理解と協力が得にくく一部の学生にしか行えないことなどがある。館員サイドの問題は，人手や時間が不足しがちで充分に準備が出来ないこと；研修の場や資料の不足；主題知識不足；学生の水準と要求の把握不足から学習に有機的に組み込まれがたい点；教育技術に欠けるので効果的に伝わらない点；総合的なプログラムが無い点などがあげられている。

教員が正式な教科として利用教育を行う例も出て来た。担当者は大部分が図書館学の教師で，武蔵野女子大学，[175]東京大学，[187]国際基督教大学，東洋大学，[194]慶応義塾大学，[195]学習院女子短大，文教大学女子短大，大阪女学院短大，[182]その他である。浜田の場合は，学生の間に大きな反響があり受講生が急増し，通信教育の学生のために地方へ講演旅行をするほどであったという。[195]どれほど一般学生が適切な情報検索手段を欲していたかが知らされると同時に指導者の力量の大切さがわかる。長沢は二つの大学で利用教育を行ったが，そこでの観察をもとに興味深い比較[187]をしている。図書館が整備さ

れ，かつ図書館利用を必要とする授業が行なわれている大学では，受講生が入りきれないほど押しかけたが，そうでない大学では学生の反応が鈍かったと述べ，利用教育が他科目の教授方法や図書館サービス全体と密接に関連していることを実証した。

小林は教員の目で学生を鋭く観察し，貴重な発言をしている。[175)196)] 現在の日本の学生に対する利用教育は，米国で行なわれているような bibliographic instruction だけでは不充分で，もっと基本的な，問題への気付きや，考えを発展させ自分なりにまとめる能力を同時に開発する必要があると言う。

金沢工業大学の例は全学的な取り組みで最も徹底したものだ。利用教育は全一年生に必修科目として科されるが，その指導は各自の専門を持つ教員が図書館学の訓練を受けサブジェクトライブラリアンとして担当している。[219)]

これら教員による指導は，単に図書館の利用法に止まらず，情報の性格，文献情報の体系や構造，情報の読みとり方，また発表方法までを含んだものが多い。

利用教育をだれがどのような形で行うべきかは議論が分れる点である。多角的な指導を10年以上も続けている国立音楽大学では，必ずしも独立した科目として教員が行う必要はないと言う。教師が課題を出した時点で，図書館員と教員が緻密な打ち合せを行った後，館員が行う形が望ましいとする。同じく長年の実績を持つ鳥取大学の宍道は，医学教育のシステムの一つとして情報検索講座は正式にカリキュラム中に組み込む必要があると言う。講義，演習，テストをセットとして行うことにより始めて指導が定着するのであり，そのためには図書館員には講義を担当するに足る資格が必要だと指摘している。[200)] 図書館員の役割は，教員に語りかけ教科として指導を行うようすすめることだと考えている者もある。[235)] 現実には教科を持てるだけの数の教員はいない。館員が教え方の技術を学ぶトレーニングを受けているグループもある。[233)236)247)] どの論文も共通して強調するのは教員と館員との緊密な協力体制である。

外国の事情を紹介する文献も多く，英国のサブジェクト・スペシャリスト制度，[177)] 米国の利用教育の動き，[194)] オレゴン大学でのコース展開，[194)] テキサス大学の総合プラン，[190)191)] オーストリラアの大学図書館紹介[220)] と，それぞれ日本の教育を考える指針を与えてくれる。

学生向きのテキストは多くの図書館で自校の学生対象に作られるようになった。市販されるものも出てきた。それらは必要な情報を正確に探すために有用

なものは多いが，ノン・ユーザーを惹付けるタイプのものはまだ無いようである。

図書館利用教育の総合的レヴュー論文も現れ，[200)210)221)208)242)] 問題点の指摘や将来の展望を示している。利用者教育が情報行動に与える効果を統計的に分析した調査もあり，[224)] そこでの考察は館員が漠然と感じていた事柄に根拠を与えてくれこれから進むべき方向を与えてくれる。

これからの利用教育を推進させるには，まず教師を始め一般の人々にそれが生涯を通じ学んでいくためには不可欠な素養であると理解させねばならない。長谷川は，図書館サイドの実践の積み重ねが学生に変化をもたらし，それが教師に強い印象を与える点を強調し同時に，教師側からの発言が他の教師に強いインパクトを持つ事実に注意をうながす。[200)]

図書館員の資質向上も各論文の強調する点だ。館員養成段階で教授法を加えるべきだとの声と同時に，現職の館員のトレーニングの場を求める声がある。教材の開発も求められている。大学図書館界では，まだ多くの実践と研究がなされねばならない。

Ⅳ 専門図書館

かなり長い間，専門図書館の利用教育については，1965年に Schiller がレファレンス・サービスを利用指導か情報提供かと論じた文中[250)] の解決法で定着していたようだ。つまり「専門図書館員は，閲覧者に探し方を教えるよりは，自分で探す」ということだ。ただし例外として「教育的なプログラムに用いられる特別なコレクションの場合には，教育的機能も認められて」いた。後藤がいくつかの研究機関の資料室を訪問した報告[256)] によれば，研究生受け入れ時や，プロジェクト・チーム開始前にはオリエンテーションの形で利用指導が行なわれている。

国分らのスタッフ・マニュアル研究グループの調査[260)]（1981年5月）によると，資料室が「利用ガイド」を作成している所はわずか17％だったと言う。また同報告は企業や施設が新入職員の受入れオリエンテーションを行う時，図書館利用ガイダンスも行っている所は資料室の利用が活発であると述べ，そのような形で指導を行う事が利用者の心理的壁を取り去るのに効果的であろうと述べている。ガイドブック作成，新入社員オリエンテーションそしてパブリシ

ティーが長い間専門図書館界での利用指導の限度であった。

しかしこの従来の動きは商用データベースの企業資料室への導入に伴ない急激に変ってきつつあるようだ。長田はその所属する情報センターでは商用データベースの利用は利用者自身が検索することを原則としていると伝えている。[7] したがって館員の役割りはその利用方法の指導をすることである。コンピュータ化，オンラインによる情報検索と従来になかった検索手段が導入されることにより，必然的に利用者への指導が専門図書館員に要求されてくるだろう。

V 公共図書館

渡辺によれば，[258] 公共図書館において利用教育は「社会教育における自己学習の場としての本来のありかを損うものではないか，統制につながるものになりはしないかという危惧から意識的に … 抑制する」面があったという。そのためか利用教育を扱う文献は公共図書館関係ではほとんど無い。

しかし反面佐藤が指摘するごとく，「欧米諸国のように，あらゆる教育機関がカリキュラムの中で，図書館の利用の仕方についての教育を授けているところでは，公共図書館が利用者にむけて，基礎的事項まで説明をする必要はないであろうが，わが国の学校のように大部分が無関心であるという状況のもとでは，何らかの手段によって最低限必要なことがらを周知させねばならない[256]」として，その必要性の認識はされ始めている。ただし「不特定多数の市民」を対象とする公共図書館であるから，その手段はパブリシティという形しかないと思われているようだ。[261]

ただ一つ例外として定着し始めた形は学校図書館との協力である。調布市，[265] 山口市，[263] 芦屋市[259] などで見られるように，学級単位で公共図書館に生徒を招待し，図書館の役割りや用い方の授業を行い，生徒たちに，図書館を親しませるのを目的としている。

興味深いのは大宮市の例で，夏休み中に公共図書館へ宿題調べにやって来る子どもたちのために，大宮市ＳＬＡが学校図書館の担当者を派遣する制度だ。[265] 本来学校図書館がやらねばならないことを公共図書館に肩代りさせているのだから当然という見方もあるが，現実のニードに合せた積極的な協力体制だと思える。

成人向けの利用教育も遠慮をせずに始めてほしいと思う。いわゆるカルチャ

ー講座形式でも良い。高名な講師を招くのではなく，館員自身が，その講師たちがしゃべる材料を集める方法そのものを伝授したら良い。その地方の女性史，住民運動の資料集め，手作りの旅など種々のテーマで調査法を知りたい人はいるはずだ。学ぶ意欲のある住民が多いことは，カルチャーセンターに集る人の数で証明済みだ。「人の話を聞かせていただく」所から一歩ふみ出す手助けをすることは，公共図書館員の楽しい役割りだと考える。

Ⅵ　一　　般

ある特定の館種の図書館がその対象となる利用者に対して行う利用教育と同時に，まったく不特定の人々への教育も考えねばならない。図書館の存在を意識しない人々も多い。考えられるアプローチは義務教育レベルの教科書，一般人向けの情報入門書，そしてマスコミを通じてのパブリシティーであろう。

図書館界は教科書中心の授業方法に対しては批判的である。反面，その教科書を通じれば一応広い国民に図書館の利用法を周知させることも可能である。そこで教科書の中に図書館を登場させたら良いという発想は大正年間からあったと言う。上田論文[262]は教科書に現れた図書館の変遷をたどっている。それによると戦後昭和36年頃までは図書館を取りあげている教科書の数は増加しているが，以後はその動きが止り，昭和41年以降には，わずか3種のみが扱っている状態だという。教科書依存の授業が行なわれている現教育体制のなかで，その教科書からも図書館の姿が消えていくのは象徴的だ。

昭和45年頃からビジネスマンや学生対象に一種の情報学ブームが起った。梅棹忠夫がオピニオンリーダーで，その『知的生産の技術[276]』に習う本が続々と出版された。それらは必ずしも図書館やその資料の使い方を対象としているものではなく，広く情報の入手法から活用法に渡って書かれている。図書館への苦言や要望も含まれている。図書館員も著者となってはいるが，学者，作家，ジャーナリストなどがそれぞれの体験を通じての情報処理方法を語っている。柿沼らはこのブームが起こる以前に，一般人向けの図書館案内書の必要を説き，その望ましい姿を提案している。[251]

一般の人々への利用のすすめとしては，マスメディアの活用が考えられねばならない。ジャーナリズムとの関係も大切だ。『図書館雑誌』が「新聞切抜帳」という欄を持ち，新聞紙上に現れた図書館を記録し，どのように図書館がメデ

ィアを通じて伝えられているかを図書館員に意識させている試みは素晴しい。あらゆる手段を通じ，図書館活用へと人々の意識を向ける工夫は，これからも進めていかねばならないからだ。

Ⅶ まとめ

教育方法の体系化は，教師の関りが大きい学校図書館界で一番進んでいる。そこでは文献の種類も雑誌論文から単行書の形へと集大成されてきている。それに比べて，大学図書館関係では研究が熟せず，まとまった著書は出されていない。

しかし各文献の内容を検討すると，学校図書館関係のものは，その理論の展開に反し実践の普及が遅れているためか，同じような内容の初歩的な必要性の指摘であるとか取り組みが，何度も繰り返して発表されている傾向がある。利用教育面ではわが国に一歩先んじている米国の文献は，理論や実践を扱うものはほぼ出そろい，現段階では皆の興味が評価法に移っている観があるが，わが国では評価法は，まだその必要性が指摘されている段階だ。

文献リストを作成して見えてくることは，教育とか指導と言う言葉が用いられている関係上，専門図書館と公共図書館においては，利用教育に対する関心が低い。しかし利用教育へのニードが無い訳ではない。それどころか大いに求められていることは，一般人向けの情報探索法の本のブームが如実に示している。この事は図書館員が利用者の隠れた要求に対し，もっと鋭い感受性を持ち応えていく必要があることを教えてくれる。

図書館のコンピュータ化に対応して，新しいタイプの利用教育へも目が向けられねばならない。現状は，井上の指摘[264]にあるように，図書館員の頭の上を越えて，オンライン業者が直接エンドユーザーへの訓練を始めている。詳細なマニュアルも作成されている。それらは必ずしも一般向けではないし，分り易くもない。情報と利用者を結びつけるために，図書館員にはそこにも又やらねばならない仕事がある。

この文で欠落している部分は，大学図書館等で自館の利用者対象に作成された利用指導用資料のリストである。それらの「利用の手引き」などと言われている印刷資料，スライド，ビデオテープ，ＯＨＰのトランスパランシィ，ＣＡＩ，ゲーム類を各館の協力を得て集めることが出来たら，情報交換用の資料セ

ンターとして役立つことと思われる。

注

① American Library Association, Education Committee *The School Library Yearbook*. A.L.A., 1929.

② Fargo, Lucile Foster *The Library in the School*. A.L.A., 1947.

③ Douglas, Mary T.P. *North Carolina School Library Handbook*. 1942.

④ Brascomb, Harive *Teaching with Books, a Study of College Libraries*. A.L.A., 1940.

⑤長野昭　公共図書館の立場から大学図書館に望む『図書館雑誌』 75(3): 125－127p., 1981.

坂本博　学生の逸出による損害と大学の厳格責任—お願い「恥」を知って—『大学図書館研究』 20: 71－77p., 1982.

泉昌一　大学生は国立図書館をどう利用しているか—アンケート実態調査から—『図書館雑誌』 76(5): 282p., 1982.

⑥大学図書館における学生の利用を考えよう—学園の民主化の方向として—『大学図書館問題研究会会報』 13: 1－2p., 1971.

佐藤貞司　Library-College: 大学図書館と教育についてのひとつのケース・スタディ『東京大学図書館情報学セミナー研究集録』 4: 1－51p., 1974.

⑦長田至弘　東芝情報センターの活動『情報管理』 28(1): 45p., 1985.

文献リスト

各項目内の配列は発表年代順とし、同年内では著者名のアルファベット順とした。雑誌が特集を組んでいる場合は，特集名のもとにまとめるか，ある著者名のもとの項目内にまとめてある場合が多い。いくつかの項目内にわたるものは重複して載せてある場合もある。

（Ｉ） 学校図書館

A 図書（およびその一部）

1） 文部省『学校図書館の手引』 師範学校教科書株式会社 1948。
2） 東京学芸大学東京第一師範附属小学校『小学校の図書館教育』 学芸図書 1949 。
3） 天理学園学校図書館研究会『小学校から大学まで図書館科の研究』 養徳社 1950。
4） 図書館教育研究会『図書館教育：読書指導の手引』（学校図書館学叢書 第２集）学芸図書 1951。
5） 文部省『学校図書館運営の手びき』 明治図書 1959。
6） 文部省『小・中学校における学校図書館利用の手びき』 東洋館出版社 1961。
7） 文部省『学校図書館の管理と運営』 東洋館出版社 1963。
8） 文部省『学習に役立つ小学校図書館』 東洋館出版社 1964。
9） 文部省『高等学校図書館運営の手びき』 大日本図書 1964。
10） 文部省『小学校における学校図書館運営の事例と研究』 東洋館 1966。
11） 文部省『学習指導・読書指導と小学校図書館』 東洋館 1969。
12） 文部省『小学校における学校図書館の利用指導』 大日本図書 1970。
13） 全国学校図書館協議会利用指導委員会『学校図書館の利用指導の計画と方法』全国学校図書館協議会 1971。
14） 文部省『情報処理能力の育成』 明治図書 1971。
15） 文部省『中学校における学校図書館運営の手びき』 大阪書籍 1972。
16） 東京学芸大学附属大泉小学校『情報処理能力育成の実践』 明治図書 1974。
17） 図書館教育研究会 図書館の利用指導 『読書指導通論―児童と青少年の読書活動』 学芸図書 142－178 p.，1978。

18) 近藤政明『図書館の利用指導と読書指導』(新訂小学校学級指導双書４)　教育出版　1979。
19) 瀬戸真・室伏武編『学校図書館運営実務百科』　第一法規　1981。
20) 北嶋武彦・今村秀夫『読書指導の基本―初歩指導から図書館利用指導まで』(教師のためのベストライブラリー)　第一法規　1982。
21) 瀬戸真ほか『読書指導と学校図書館の利用Ｑ＆Ａ』　第一法規　1982。―一問一答でまとめたもの。３，４章が利用指導。
22) 山崎哲男『小学校の利用指導の実際』(シリーズ活動する学校図書館４)　全国学校図書館協議会　1982。
23) 全国学校図書館協議会利用指導委員会『自学能力を高める学校図書館の利用指導』　全国学校図書館協議会　1982。
24) 深川恒喜・北嶋武彦・瀬戸真編　学校図書館の利用の指導と読書指導『現代学校図書館事典』　ぎょうせい　99－418 p. 1982。
25) 倉沢栄吉・栗花落栄『情報処理教育の方法』　教育出版　1983。
26) 増田信一『学び方を養う学校図書館の指導』　学芸図書　1983。
27) 文部省『小学校・中学校における学校図書館の利用と指導』　ぎょうせい　1983。４分類21項目にと整理。
28) 室伏武ほか『新学校図書館事典』　第一法規　1983。―17章：教科等の指導と学校図書館　19章：学校図書館の利用の指導。
29) 増田信一『学び方を養うレポート学習の指導』　学芸図書　1984。
30) 後藤満彦『中学校・高校の利用指導の実際』(シリーズ活動する学校図書館５)　全国学校図書館協議会　1984。

B　雑誌論文

31) 深川恒喜　ガイダンスと学校図書館　『６・３教室』 3(5):16－20, 1949。
32) 図書館教育を教育組識の体系に入れる―新日本の教育・第３篇日本教育の再建・第12章図書館（連合軍総司令部民間情報教育局編）『教育技術』 3(11):11－13, 1949。
33) 加賀栄治　図書館教育－如何に図書及び図書館利用法を指導すべきか－１～３『学校図書館』 9:45－51, 10:42－47, 11:31－34, 1951。
34) 高橋康　図書館（準）教科書「図書館と私たち」刊行に当り　『学校図書館』 3:50－51, 1951。
35) 阪本一郎ほか　読書指導と図書館教育（座談会）『学校図書館』 24:28－36,

1952。
36) 井内龍三ほか　読書指導と図書館教育　『教育技術』 8(9):133－140，1954。
37) 四方田正作　読書指導か図書館教育か　『学校図書館』 40:8－11，1954。
38) 芦谷清　図書館教育における諸問題　『学校図書館』 61:26－29，1955。
39) 和久武雄　図書館教育カリキュラム研究　『学校図書館』 53:32－41，1955。
40) 増村王子　図書館利用教育の一年をかえりみる　『カリキュラム』 39:72，1956。
41) 太田正章　図書館利用学習の問題点とその解決　『学校図書館』 83:50－54，1957。
42) 加賀栄治　図書館教育に対する根本的考え方　『学校図書館』 97:49－54，1958。
43) 田中康彦ほか　新入生に対する図書館教育の記画　『学校図書館』 90:34－44，1958。
44) アーラース，E．E．　図書館利用技能の育成—誰の責任か（室伏武訳）『学校図書館』 101:33－36，1959。
45) 前川夏彦　高校における図書館教育—国語科の中にどのように組み入れたか『学校図書館』 115:48－51，1960。
45b) 木村一朗　本校図書館の利用指導　『学校図書館』 122:52－54，1960。
46) 芙容子　図書館教育をめぐって　『学校図書館』 125:63－65，1961。
47) 松本茂　学校図書館の利用指導と読書指導の年間計画　『学校図書館』 126:25－28，1961。
48) 板橋清　学校教育の全体計画と利用指導『学校図書館』 144:13－18，1962。
49) 井沢純　学校図書館の利用指導について『学校図書館』 144:24－28，1962。
50) 西本国男　学校図書館の利用を高める指導—小学校の場合　『学校図書館』 145:40－43，1962。
51) 阪本一郎　利用指導の意義と方法—もう一度，考えてみよう　『学校図書館』 144:8－12，1962。
52) 品川洋子　学校図書館利用指導の一つの試み　『学校図書館』 145:35－38，1962。
53) 鳥越信　「学校図書館利用の手びき」を批判する　『学校図書館』 144:29－32，1962。
54) 渡辺昭一　義務教育学校における図書館教育計画　『学校図書館』 144:19－28，1962。
55) 山本勇造　図書館教育における問題点　『学校図書館』 137:33－35，46，1962。

56）小杉英夫　図書館教育と読書指導—中学校における図書館教育と読書指導の協力態勢確立への一試案　『学校図書館』 150:50－54，1963。—テキスト，ワークブック，テスト用紙のセットを作成。
57）杉原開　中学校におけるカリキュラム作成とその反省　『学校図書館』 170:38－41，1964。—津山市での実践。
58）細井龍夫　読書指導以前のことども（２）『学校図書館』 171:40－44，1965。—多角的な方法の組合せ。プログラム学習も。
59）阪本一郎　図書館利用のプログラム学習『学校図書館』 173:55，1965。
60）白石正彦　教育の一環としてのレファレンスサービス—高校図書館における特殊性　『図書館雑誌』 59(5):17－19，1965。
61）上原浩一　教育方法としての図書館利用—学校図書館学樹立のための一試論『学校図書館』 206:36－38，43－45，1967。
62）阪本一郎　「利用指導」の定着（回顧・日本の学校図書館—４—）『学校図書館』 213:51－54，1968。
63）学校図書館の利用指導（特集）『学校図書館』 233:9－54，1969。—学校図書館の利用指導の問題点（鈴木英二，9－13），「学校図書館の利用指導」の「これまで」と「これから」（深川恒喜，14－18），全国ＳＬＡ利用指導委員会のカリキュラムについて（小川敬一，19－23），教育課程と改訂と学図の利用指導（井沢純，24－26），学校現場では，こう考える（石上正夫，27－30），利用指導の時間をいかにして生みだすか（小松崎寛，33－35），最抵限何をなすべきか—小学校（本橋久雄，36－40），最低限何をなすべきか—中学校（石川哲三，43－47），高等学校の利用指導(管井光男,48－51)，小・中・高の一貫性をふまえた利用指導(定金恒次,52-54)
64）菅井光男　児童生徒の図書館体験と大学生の利用状況について　『学校図書館』 240:51－54，1970。
65）品川洋子　学校図書館の利用指導—中・高校—（全国学校図書館協議会，山形大会）『学校図書館』 242:13－16，1970。
66）深川恒喜　文部省刊行の学校図書館手びき書—「学校図書館の手びき」から「小学校における学校図書館の利用指導」まで（回顧日本の学校図書館—27—）『学校図書館』 243:50－54，1971。
67）井沢純　学校図書館の動向と利用指導　『高図研会報』 100:2－3，1971。
68）金子貞子　学校図書館利用指導実施上の問題点，学校図書館利用指導書手引書『神奈川県図書館学会誌』 30:11－15，15－27，1971。
69）黒沢浩　利用指導のあり方（新しい学図への道10）『学校図書館』 244:67－70，1971。

70）宮口光明　学校図書館の利用指導　『長野県図書館協会会報』 73:7－9，1971。

71）小川敬一　学校図書館の利用指導　『学校図書館』 253:25－29，1971。

72）利用指導をいかに定着させるか（特集）『学校図書館』 246:9－47，1971。 —学校図書館利用指導の意義（藤川正信，9 －13），改訂学習指導要領と利用指導（井沢純，14－17），読書指導の考え方—その変せんと全国ＳＬＡの研究 （芦谷清，18－21），利用指導定着への実践：自主的な資料活用をめざして（武内滋， 22－25），学級指導で・教科の中で（金子貞子，25－29），全職員の共通理解と協力（井田哲治郎，29－34），図書館の機能面の検討から（中沢宏行，34－38），高校学習入門としての試み（白神信江，38－42），特設時間を設置して（福塚一史，42－47）

73）興梠照　学校図書館の利用指導；図書館教育はどうあるべきか（パネル—後藤正典，増田信一，児島和子，中尾正誼）；高橋英子・近藤美貴子ほか　利用指導『東京都の学校図書館』 9:7－13，37－39，47－49，1971。

74）小林章　社会科学習における図書館利用指導—日本史学習の場合；石原信実　同志社における図書館利用指導について；加茂弘　学校図書館における利用指導；鈴木一男　学校図書館利用指導のあり方　『図書館研究（大阪府高校』 8:42－45，48－53，67－71，74－77，1971。

75）小中学校図書館部会　学校図書館の利用指導はどのようにしたらよいか　『長野県図書館協会会報』 72:10－13，1971。

76）芦谷清　学図研究の現在—教科学習・読書指導・利用指導（兵庫大会にみる学図，特集）『学校図書館』 266:16－19，1972。

77）遠藤英三　学図への提言（14－15）利用者のための図書館を（1－2）『学校図書館』 258－259:68－71，68－71，1972。

78）石田喜代子　学校図書館の利用指導—実施後の提案　『神奈川図書館学会誌』 32:9－15，1972。

79）加茂弘　図書館報による指導の実例（1）『学校図書館』 263:49－52，1972。

80）北嶋武彦・小山郁子 小学校における図書館利用指導の研究　『図書館学会年報』 18(1):13－24，1972。

81）小川敬一　深めたい論議授業の改造—学校図書館利用指導のすすめ方・小学校『学校図書館』 226:36－38，1972。

82）大洋義視　定着がむずかしい利用指導　『学校図書館』 257:59，1972。

83）池田信夫　新教育課程と学校図書館の利用指導；和食雅子　国語科学習のための利用指導—資料カード作成による利用指導；図書館利用指導のための実態調査；中原晃雄　世界史学習と関連文学作品の利用指導；和食雅子　大阪府学校図書館および図書館資料の利用指導に関する調査；井上哲一　全国「利用指導」推進校一覧

『図書館研究（大阪府高校）』 9:53－57，58－66，68－74，75－83，84－96，97－105，1972。
85）荒谷浩　方法の教育・学び方の教育を根幹にすえて『学校図書館』 273:10－13，1973。
85）平井芳男　週間行事による図書館指導―4年目を迎えての反省『学校図書館』 268:70－72，1973。
86）北村久也　生涯教育と学校図書館　『図書館界』 25(2):74－77，1973。
87）北嶋武彦・小山郁子　中学校における学校図書館利用指導の実証的研究―都内中学校における実態調査を中心に　『図書館学会年報』 19(1):35－43，1973。
88）森英夫　西宮市における利用指導の研究（組識的研究をどう進めるか―特集）『学校図書館』 272:27－30，1973。
89）小沢とみ江　愛知県弥生小学校における学校図書館の利用指導―インフォメーションファイルによる情報の収集・整理・利用『教育と情報』 184:24－28，1973。
90）和食雅子　情報を生かした私の授業―資料カード作成による学習〔高校〕（実践記録）『学校図書館』 271:39－43，1973。
91）依田八重子　学校司書と図書館利用指導―図書委員によるオリエンテーション『学校図書館』 279:59－62，1974。
92）沢利政　中学校利用指導内容再編の異色分科会：第224分科会・情報処理の指導，藪内秀夫　高等学校・高まるブームのなかで：第235分科会・利用指導の計画と実践（全国学校図書館研究東京大会の成果と課題―特集）『学校図書館』 288:34－36，39－41，1974。
93）利用指導はもっと活発にならないか（特集）『学校図書館』283・9－46，1974。 ―「学び方の教育」としての利用指導（笠原良郎，10－13），「技能」の利用指導を否定する（杉山久夫，14－18），危機の教育のなかで図書館利用指導を考える（柿沼隆志，19－22），利用指導の現状と課題・調査報告（北嶋武彦，小山郁子，25－29），利用指導はこれでよいか―欧米視察の経験から（中尾八郎，30－32，35－37），生徒の要求にそった利用指導（座間有敬，39－42），わが校の利用指導―図書館整備を中心に（山田安秀，44－46）
94）遠藤英三　利用に供する―もろもろの阻害要因〈学校図書館法第2条〉　『学校図書館』 300:27－32，1975。
95）深川恒喜・保坂勇　小学校国語科教科書教材を活用した図書館利用指導の研究（1－3）『図書館学会年報』 21(3):138－145，22(3):120－128，24(3):113－122，1975，1976，1978。
96）北嶋武彦・小山郁子　高等学校における学校図書館利用指導に関する実証的研究

—全国実態調査を中心として　『共立女子大学文芸学部紀要』 21:1－16，1975。
97）鍋島稔　利用指導とオリエンテーション『学校図書館』 292:36－38，1975。
98）高橋はた　利用指導の実際と問題点—弾力性あるカリキュラムで　『学校図書館』 302:67－69，1975。
99）山崎哲男　利用指導—研究とはうらはらに未定着〈学校図書館法第4条〉『学校図書館』 300:59－63，1975。
100）全国ＳＬＡ「学校図書館の利用指導について」の調査から　『学校図書館速報版』 761，1975。
101）学図のより充実を！東京都高図研教育課程改定に要請　『学校図書館速報版』 762，1975。
102）舟辺充康　教科と結びつけた利用指導　『学校図書館』 309:46－48，1976。
103）北嶋武彦・小山郁子　小・中・高等学校における学校図書館利用指導の現状と課題『図書館界』 27(6):186－194，204，1976。
104）数納操　読書・利用指導とライブラリー・アワー　『学校図書館』 307:41－44，1976。
105）牧野泰子　学校教育体系の中で図書館の利用についての教育を　『図書館雑誌』 70(9):386－387，1976。
106）島袋盛慎　高等学校図書館教育への提言『沖縄図書館協会誌』 7:29－34，1976。
107）安藤重夫　時間の確保に論議集中〔利用指導〕，矢田克士　おもしろく，わかりやすい利用指導はいつできるか，平井芳男　利用指導が詰め込み教育脱出の突破口に『学校図書館』 312:29－31，32－34，37－39，1976。
108）鈴木一男　学校図書館の利用指導について，百瀬昭二　学校図書館の利用指導について　『図書館研究（大阪府高校）』 12:53－55，56－60，1976。
109）後藤圭三，後藤義憲　わが校の図書館活動を評価する（小学校），（中学校）『学校図書館』 316:18－20，23－25，1977。
110）中川昭則　利用指導—学び方を学ばせる教育活動　『学校図書館』 319:66－68，1977。
111）武内滋　小学校における学校図書館利用指導　『中部図書館学会誌』 18(1):1－8，1977。
112）高橋一男　教科内学習における利用指導の展開—現代国語の試みから　『学校図書館』 332:63－65，1977。
113）八木清江　学校図書館の機能について（試論）『図書館評論』 18:37－49，1977。
114）学習指導要領における情報利用教育の位置づけについて—要望書—　『ＪＬＡ図書館学教育部会会報』 5:12，1977。

115）新学習指導要領における図書館・図書指導関連条項〔資料〕『学校図書館』324:63－68，1977。
116）特集・ＡＶ教材を使った利用指導　『学校図書館』 322:14－45，1977。
—ＴＰを使った利用指導（鈴木郁夫），（吉沢京子），ＶＴＲを使った利用指導（高梨佐智子），ＴＰ教材の作成方法（宮本一），スライドを使った利用指導（深沢賢一郎），ＶＴＲ教材の作成方法（林野俊彦），スライドの作成法（渡辺苞）
117）江連栄一　利用指導のテキスト・手引を作成して—栃木県ＳＬＡの共同研究『学校図書館』 336:51－54，1978。
118）宮城シズ　利用指導の計画と実践—名護市立羽地小学校　『学校図書館』330:45－48，1978。
119）中沢宏行　中学校における「利用指導」—そのあり方と展開例—，八木清江　学校図書館の利用指導—高等学校の場合　『現代の図書館』 16(3):157－162，149－156，1978。
120）利用指導の計画と実践　『学校図書館』 339:31－41，1979。—どうしたら利用指導を浸透させることができるか（阿部清英），利用指導の実像を求めて（山田明彦），利用指導定着の道はけわしい（後藤満彦）
121）特集・利用指導テキストとその活用　『学校図書館』 348:9－48，1979。—利用指導をどうとらえて展開したらよいか（後藤満彦），小・中学校用テキストの特徴と問題点（山崎哲男），高校用テキストの特徴と問題点（中村宏），ファイル資料の作成（馬場昌子），本のつくりとあつかいかた（井上泰子），目録の使い方（大西亮），切り抜き資料の作り方（藍原友善），目録のひき方（佐元光子），幅広い指導で現状打開を（高橋一男），利用指導とテキストの変せん—昭和20・30年代を中心に（芦谷清）
122）古賀節子　図書館・メディア利用教育—（海外リポート・ノースカロライナから７）『学校図書館』 355:52－54，1980。
123）古賀節子・北原正子・東海林典子　ひとりで学べる図書館の使い方—利用指導カードを試作してみて（１—４）『学校図書館』 373:29－34，1981，379:46－50，1982，386:50－54，1982，397:51－54，1983。
124）特集・利用指導の新展開　『学校図書館』 373:9－46，1981。—利用指導のあり方を問う（村上真治，９－12），利用指導の新しい基準（笠原良郎ほか，13－16，21－23，18－20），利用指導のワークブック（依田逸夫，35－37），一般教師への利用指導のすすめ（西村愛子），すべての教師が利用指導を（異口昭典）
125）加藤一夫　学校図書館利用指導をめぐる諸問題　『神奈川県図書館学会会誌』51:1－3，1982。

126) 川北信彦　中・高校における図書館利用教育『図書館界』 183:256－263，1982。

127) 内田真木　「ハーモニー・タイム」と図書館利用指導の時間　『学校図書館』 375:25－27，1982。

128) 吉岡日三雄　自ら学ぶ力を育てる利用指導の実践，江連栄一　「学ぶということ」に結びついた利用指導　『学校図書館』　385:52－54，36－38，1982。

129) 特集・図書館資料を活用した授業　『学校図書館』 383:9－52，1982。 —自学能力の育成と学校図書館の役割（武田忠），自ら学ぶ授業—国語・空を飛ぶクモを通して（柴田悦子），自ら学ぶ授業—国語・社会・理科を中心に（山口清子），「調べて書く作文」の学習（藤正文，程塚英雄），図書館を好きにさせる抵学年の指導（黒鳥哲子），自学能力を育成する利用指導とは何か（山崎哲男）

130) 北嶋武彦ほか　学校教育における児童・生徒の情報処理能力の育成に関する研究（発表）『図書館界』 192:138－143，1983。

131) 高橋元夫　ひとりで学ぶ図書館資料の使い方—遊びのプログラム—（1～12）『学校図書館』 390－403:68－69，1983－1984。

132) 上田修一・加藤桂子・古賀節子　マイクロ・コンピュータによる図書館の利用指導『学校図書館』 395:36－40，1983。

133) 山崎哲男　読書指導・利用指導関係文献あんない—初めて係になる人のために—『学校図書館』 389:52－54，1983。

134)　自ら学ぶ力の育成をめざして—利用教育をどう展開するか—（第2分科会・学校図書館）『昭和58年度山口全国図書館大会記録』 29－41，1984。

135) 福永義臣　高等学校における利用指導，沢利政　小学校における利用指導（山口大会—成果と課題・特集）『学校図書館』 409：23－25，27－29，1984。

136) 特集・学年始めの図書館利用案内—オリエンテーション—　『学校図書館』 413:9－30，1985。 —オリエンテーション（その内容と方法）（紺野順子，9－14），係教諭と学校司書の連携で授業時間に実施（河野加代子，17－19），開校以来10年の試行錯誤（山本裕子，20－22），図書の時間を3時間使って実施（黒木裕子，28－30）

137) 大越朝子　学校教育における図書館利用指導の現状　『図書館雑誌』 79(4):193－195，1985。

C　利用者用資料（例）

138) 兵庫県図書館協会『図書館と私たち』　文教書院　1950。

139) 加古川中学校図書館『図書館教育の研究』文教書院　1951。

140）長野県図書館協会『図書館利用の手引き』　令文社　1963。
141）長野県図書館協会『みんなの図書館』　令文社　1963。
142）東京都高等学校図書館研究会『高等学校の図書館』　日本書院　1965。
143）かいきよみち『やさしい情報整理学』　社会思想社　1971。
144）かさはらよしろう『本とりえちゃん』（しゃかいの絵本）ポプラ社　1973。
145）磯山瀞一ほか『高校生の基礎学習—生きた学び方，考え方—』　新日本出版社　1977。
146）東京都高等学校図書館研究会『学び方の技術；高校生の図書館利用法』　日本書院　1978。
147）新潟県学校図書館協議会・新潟県高等学校教育研究会図書館部会共編『Biblos —高校学校図書館利用の手びき』　萬松堂出版部　1978。

（Ⅱ）　大学図書館

A　雑誌論文（主として）

148）藤田豊　ガイダンスとしての図書館利用教育　『図書館界』14:84－86，1952。
149）村上清造　大学図書館における参考業務と学生指導—富山薬専から富山大学薬学部への経験を通じて　『図書館雑誌』48(4):15—18，1954。
150）村上清造　文献探索の基本問題—図書館書誌学の組立　『図書館学会年報』3(1):53－63，1956。
151）三浦吉春　日本大学三島図書館の教育参加　『図書館雑誌』52(9):26－27，1958。
152）中沢浩一　本学における文献利用指導の実際，村上清造　学生に対する文献利用指導の実際，徳岡暁正　学生に対する文献検索の指導　『薬学図書館』6（2）：29－30，31－32，33－35，1961。
153）村上清造　薬学教育と図書館の利用　『薬学図書館』7(1):6－8，1962。
154）村上清造　大学図書館における奉仕活動『図書館雑誌』56(5):4－7，1962。
155）石川清治　学生の図書館利用学習—教授形態との関連において　『図書館界』17(2):34－45，1965。
156）Josey，E.J．矢野光雄訳　大学図書館員の役割と図書館利用の指導　『現代の図書館』4(1):47－52，1966。
157）繰田智晴　大学新入生の図書館オリエンテーション—新しいアプローチの必要性（海外文献紹介）『図書館界』18(2):61－62，1966。

158) 吉本瑞応　医学生に対する文献探索指導『医学図書館』 13(4):275－277，1966。

159) 松尾恒雄　薬学文献学教育の意義と問題点　『薬学図書館』 12(1):1－6，1967。

160) 伊佐公行　東京電機大学図書館 Orientation の実情（パネル発表要旨）『昭和42年度（東京都私立短大協会図書館研究委員会）図書館研修会報告書』 22－28，1968。

161) 平清二　大学図書館における教育的機能『図書館学研究報告　東北大学附属図書館』 1:137—152，1969。

162) 吉本端応　医学研究者に対する文献利用ガイド，　沼崎宣子　学生に対する文献利用のガイド　『医学図書館』 16(4):297－304，329－331，1969。

163) 村上清造　薬学文献学教育を終えて（薬学文献学教育の現状　その1），和田忠男　文献学と情報管理の薬学教育に占める位置（その2）『薬学図書館』 16(1):23－26，26－28，1971。

164) 安部垂巳　オリエンテーション『牟礼』　2(4):6－9，1972。

165) 松島春子　オリエンテーション　『私立大学図書館協会会報』 58:95－109，1972。

166) 松尾恒雄　特別実習としての文献学　『薬学図書館』 16(3):117－123，1972。

167) 徳岡暁正　薬学文献外論—ある閑想録　『薬学図書館』 16(4):169－173，1972。

168) 小野田正登　高専の教育と図書館利用教育について　『図書館学』 23:15－22，1973。

169) 笹本光雄　薬学文献学教育雑感（薬学文献学教育の現状　その5）『薬学図書館』 17(¾):157－160，1973。

170 大学における教育と図書館（パネル討議）藤田善一司会『中国四国地区大学図書館協議会誌』 16:21－29，1974。

171) 北嶋武彦　大学における図書館の利用指導に関する一考察　『大学図書館研究』 3，4:14－17，1974。

172) 丸本郁子　本校の資料利用教育の一面　『大阪女学院短期大学紀要』 6:65－96，1975。

173) 新聞肇　大学図書館の奉仕活動について—特に文献検索ガイダンスについて『図書館学』 26:33－36，1975。

174) 独協大学図書館企画班　大学図書館オリエンテーションの一試み『図書館雑誌』 70:415－419，1976。

175) 深川恒喜，小林短子ほか　大学生を対象とする図書館利用指導について　『武蔵野女子大学紀要』 11:29－36，1976，12:87－94，1977，13:79－90，1978。

176) 福井司郎　学生のための大学図書館—利用指導について『館灯（私立大学図書館

協会東海地区研究会報）』15:12－18，1976。
177）及川三千男　イギリスにおけるサブジェクトスペシャリストについて『図書館学研究報告　東北大学附属図書館』 9:316－326，1976。
178）宍道勉　医学図書館における利用者教育『医学図書館』 23(2):79－86，1976。
179）小山郁子　学生のための図書館教育について—実態調査の結果から『短期大学教育』 35:103－109，1977。
180）丸本郁子　一つの試み・一般学生にも図書館学の知識を『図書館雑誌』 71(9):408，1977。
181）丸本郁子　短大における図書館の役割　『大阪私立短期大学協会研究報告集』 13:35－40，1977。
182）丸本郁子　「情報学」の試み　『大阪女学院短期大学紀要』 8:35－50，1977。
183）宮崎万寿　スライドによるガイダンス—大学の小図書館室における試み　『ＬＩＳＮ』 12:43－44，1977。
184）斎藤博　本の倉庫から情報の窓口に；図書館を学生の情報処理練習場に『私立大学図書館協会会報』 69:40－47，1977。
185）遠山潤　本学（東京女子大短大）図書館におけるオリエンテーション実践報告『牟礼』 7(2):22－27，1977。
186）深井耀子　丸本郁子：図書館利用教育の試み『図書館界』 30(4):145－146，1978。
187）長澤雅男　図書館の利用教育（講演）『昭和52年度東京都私立短大協会図書館司書実務研修会集録』 1－14，1978。
188）小野真理子　学生に対する利用指導—オリエンテーション・文献検索ガイダンスを中心にして『館灯』 16:16－25，1978。
189）阪田美枝　同志社女子大学におけるオリエンテーション計画　『図書館界』 30(4):155－159，1978。
190）渋川雅俊　ライブラリー・インストラクション—知識への一つの接近法（テキサス大学図書館利用教育総合計画の概要付）『ＫＵＬＩＣ』 11:10－15，1978。
191）渋川雅俊　大学図書館利用者教育研究序説「テキサス大学図書館利用者教育総合計画」を中心として『ＬＩＢＲＡＲＹ　ＡＮＤ　ＩＮＦＯＲＭＡＴＩＯＮ　ＳＣＩＥＮＣＥ』 16:235－251，1978。
192）大学図書館における新入生オリエンテーション及びガイダンスのあり方—全国大学図書館実態調査を中心にして（私立大学図書館協会東地区部会研究部閲覧奉仕研究分科会）『私立大学図書館協会会報』 70:48－83，1978。
193）石井浅子，芝原翠，柴田さち子，遠藤裕恵　短大図書館教育を考える（実態発表）

『昭和52年度東京都私立短大協会図書館司書実務研修会集録』 34－44，1978。

194）図書館の利用指導（特集）『現代の図書館』 16(3):111－139，1978。 ―米国大学図書館における利用指導活動の発展（ウィリアムスみつ子，111－114），大学図書館利用法講座 UNIV. of OREGON （外山良子， 115－130 ），大学における図書館の利用指導（井出翕， 131－139 ）

195）浜田敏郎　学生のための図書館利用教育のあり方と司書の役割り（基調講演）『昭和54年度　私立短大図書館担当者研修会報告書』 7－21，1979。

196）小林矩子　大学生に対する図書館利用指導―最近の米国の動向についての―考察『武蔵野女子大学紀要』 14:51－63，1979。

197）毛利和弘　レファレンス実施における教育効果と教育的配慮への考察―利用指導を主として『私立大学図書館協会会報』 72:98－107，1979。

198）成山雅康　「大学図書館における利用指導」について『ライブラリアンシップ』 9:15－18，1979。

199）田沢恭二　「大学図書館利用案内」比較研究序説　『東京大学図書館情報セミナー研究集録』 3:3－51，1979。

200）利用者教育（特集）『医学図書館』 26(4):119－125，1979。 ―文献利用指導における問題点（長澤雅男， 119－125 ），図書館の利用者教育―思想と展望（宍道勉，126－133），文献検索指導（西岡正行ほか， 134－141 ），国立音楽大学図書館における利用者教育（長谷川由美子， 142－150 ）

201）丸本郁子　図書館利用教育をしてみると『短期大学図書館研究』 1:57－62,1980。

202）松井良恵　オリエンテーションについて（ノートルダム清心女子大学附属図書館）『私立大学図書館協会会報』 74:107－110，1980。

203）室住賢一　大学図書館の教育的機能―図書館利用指導講座を中心として『ライブラリアンシップ』 11:21－29，1980。

204）三河三明　図書館学教育と利用者教育―情報教育について『東海地区大学図書館協議会誌』 25:47－49,1980 。

205）２０５）望月京子　私用者教育の実施計画『第14回医学図書館研究集会論文集』 17－23，1980。

206）阪田蓉子　国際基督教大学（ＩＣＵ）における図書館利用法指導『図書館雑誌』 74(6):264－265）1980。

207）椎葉敏子　図書館利用教育Ⅰ～Ⅱ『牟礼』 10(3):32－38，1980，11(3):21－29，1981。

208）菅原春雄　情報処理教育の課題―大学の場合―『文教大学女子短期大学研究紀要』

24:11－20，1980。
209）寺田正博　図書館教育について『(東京都私立短期大学協会図書館研究委員会）昭和55年度図書館研究協議会集録』 32－34，1980。
210）大学図書館における利用者指導 ― ガイダンス（特集）『塔（国立音楽大学図書館報)』 20:2－58，1980。 ―大学図書館の教育的機能と利用者教育（長谷川由美子，２－１９），図書館のガイダンスをめぐって―音楽教育科の場合（座談会），ガイダンスをめぐる先生方との座談会を終えて（座談会），学生からみた図書館の活動―ガイダンスを中心にして（座談会）
211）袴田次雄　ビデオによる新入生向図書館案内映画の作成『大学図書館研究』 19:70－75，1981。
212）鬼頭當子　新入生オリエンテーションフィルム制作について『日本私立大学連盟一般研修報告書―図書館関係　昭和56年度』 52－57，1981。
213）近藤英子　利用者へのオリエンテーション―徳島大学附属図書館蔵本分館の場合『薬学図書館』 26(1・2):36－40，1981。
214）渋田義行　新入生のための図書館ツアー― Self－paced－orientation の演習について　『ライブラリアンシップ』 12:36－41，1981。
215）須藤美奈子　図書館利用指導教育―リポート作成との関連において―『山脇学園短期大学紀要』 19:35－51，1981。
216）寺崎昌男　大学教育と図書館『図書館雑誌』 75(3):119－121，1981 。
217）高木忠　東北大学附属図書館における新入生図書館利用オリエンテーション―テレビによる試み『大学図書館研究』 19:65－69，1981。
218）渡辺敏一　大学新入生と図書館―図書館の利用経験と利用方法の理解度―『年礼』 11(3):30－39，1981。
219）竺覚暁　サブジェクトライブラリアン制と利用者教育『丸善ライブラリ―ニュース』 125:5，1982。
220）平賀増美　モナシュ大学の図書館『ＬＩＳＮ』 32:47－50，1982。
221）菊池しづ子　大学における図書館利用教育ていて『図書館界』 34(2):147－155，1982。
222）丸本郁子　学生の主体的学習を支えるもの―図書館利用教育の試み―『一般教育学会誌』 4(2):76－80，1982。
223）西田文男　図書館利用指導について『帝塚山学院大学研究論集』 17:72－78，1982。
224）宍道勉　大学図書館に対する利用者の意識と行動―その統計的考察―『東京大学

図書館情報学セミナー研究集録』 17:1－57，1982。

225）図書館の利用をすすめるために（小特集）『図書館界における利用教育について（渡辺信一， 237－242 ），大学における利用指導の意義について（渋谷義行，243－248 ），短期大学における図書館利用教育（柏田雅明， 249－255 ），大学教育のなかで図書館利用・文献検索法を指導して（丸本郁子， 270－275 ）

226）薬学情報科学・文献学教育の現状　『薬学図書館』 26(4):190－204，1982。

227）竺覚暁　金沢工業大学ＬＣのコンピュータ利用―カードレス・ライブラリー・システム『学校図書館』 395:57－60，1983。

228）藤島隆　医学図書館における―事例（図書館の広報活動）『薬学図書館』 28(4):267－271，1983。

229）小林かず子　図書館案内の作成『薬学図書館』 28(4):263－266，1983。

230）長沢千恵　図書館の教育利用について―アンケート調査分析を中心に―『短期大学図書館研究』 4:32－39，1983。

231）小川桂子　ＶＴＲによる図書館のオリエンテーション『図書館雑誌』77(12):768－770，1983。

232）宍道勉　利用者教育が図書館利用に及ぼす効果について『大学図書館研究』 23:9－19，1983。

233）図書館員による利用指導の充実めざす―短期大学図書館部会図書館利用指導ワークショップより―『図書館雑誌』 77(12):765－767，1983。

234）利用教育の現状と課題（全国図書館大会短大分科会）『昭和57年度　福井　全国図書館大会記録』 78－88，1983。

235）短期大学における図書館利用教育『昭和58年度私立短期大学図書館担当者研究修会報告書』 24:145－149，1983。

236）『図書館利用指導ワークショップ報告書―指導案を中心として―」日本図書館協会短期大学部会　1983，『第２回…』 1984。

237）市古健次　レファレンス・サービスとライブラリー・インストラクション―スライドの試作―『ＫＵＬＩＣ』 18:16－22，1984。

238）石山洋　スェーデンの大学図書館人が見た日本における図書館利用教育『図書館学会年報』 30(3):134，1984。

239）森山昭郎・内海絹子　文献検索の教授法―国際関係論の場合『ＩＤＥ　現代の高等教育』 257:72－80，1984。

240）長田秀一　図書館利用者教育に関する若干の考察―亜細亜大学学生に対するアンケート調査を踏まえて―『亜細亜大学教養部紀要』 30:27－40，1984。

241）尾田真知子　図書館利用指導実施まで『図書館雑誌』 78(10):654－655，1984。

242）椎葉俶子　短大図書館における利用指導『牟礼』 14(3):20－25，1984。
243）山本芳枝　短期大学図書館における利用指導について―本館での実践をふまえて―『図書館学』 44:12－17，1984。
244）図書館サービスの展開と充実―利用指導へのアプローチ（短大高専分科会）『昭和58年度山口全国図書館大会記録』 66－81，1984。
245）短大図書館利用指導調査グループ　短大図書館の利用指導に対する調査報告『図書館雑誌』 78(12):814－815，1984。
264）丸本郁子　図書館利用教育『図書館界』 200:297－303，1985。
247）生涯学習と図書館利用指導（特集）『図書館雑誌』 79(4):190－204，1985。 ―生涯学習時代の図書館利用教育（長澤雅男， 190－192 ），利用指導担当者の育成―短大図書館を例に（丸本郁子， 196－198 ），大学図書館の利用指導（濱田敏郎， 199－201 ），放送大学の図書館運営と利用指導（近藤禧禔男， 202－204 ）
248）岡山県短期大学図書館協議会『昭和59年度第２回研修会報告書：図書館利用指導』 1985。

（Ⅲ）一般（専門図書館，公共図書館，館種を越えて共通するもの）

A　雑誌論文（主として）

249）小畑渉　図書館教育本質論『図書館界』 8:1－4，1951。
250）Schiller，Anita R．レファレンス・サービス：利用指導か情報提供か『現代の図書館』 4(1):1－8，1966。
251）柿沼隆志　図書館利用案内書の比較・分析『学校図書館』 210:33－42，1968。
252）平賀増美　図書館の利用指導『図書館奉仕論』理想社　202－221，1969。
253）岡田温　図書館教育百年『現代の図書館』 7(1):10－17，1969。
254）菅原春雄　情報化社会における情報処理技術論　『奥州大学紀要』 2:51－60，1970。
255）井上如　質科室の利用案内・標示の研究（講演）　『神資研』 11:17－19，28，1977。
256）管井光男　小学校から大学までの図書館利用指導計画『図書館学』 31:3－9,1977 。
257）井出翕　情報流通のコミュニケーション過程に基づく理論的転開，後藤光明　東京経済大学・日立製作所中央研究所・日本経済センター・電気通信総合研究所を訪ねて，佐藤政孝　図書館利用促進のための一つの條件『専門図書館』 76:3－7，

8－14，15－20，1979。

258）木下順一　機械検索時代における利用者教育　『第7回医学図書館員セミナー論文集』　261－269，1981。

259）清田立夫　利用者へのオリエンテーション—興和㈱東京研究所図書室の場合『薬学図書館』 26(1・2):45－46，1981。

260）渡辺信一　図書館における利用教育について，鬼丸貞彦　学校と協力して児童に図書館利用を紹介する試み　『図書館界』 33(6):237－242，264－269，1982。

261）国分信，桂啓壮　専門図書館の利用を阻む壁—館員と利用者とが関る局面を中心として　『現代の図書館』 21(2):97－102，1983。

262）寺田瑛子　ジャーナリズムと図書館，塚田隆一　公共図書館におけるパブリシティ『現代の図書館』 21(4):211－216，217－222，1983。

263）上田公一，沢田真，渡辺晴美　教科書に現われた図書館　『現代の図書館』 21(9):220－210，1983。

264）植山遠孝　公共図書館が学校と連携して行う生徒を対象とした図書館の利用研修『昭和58年度山口全国図書館大会記録』 29－41，1983。

265）井上如　図書館員教育からユーザー教育へ—文献情報論からの考察—　『ライブラリアンズ　フォーラム』 1(3):21－30，1984 。

266）栗原克丸　学校図書館と公共図書館の役割・協力，小林申幸　夏休み中は学図担当者が常駐—埼玉県大宮市図書館，座間直壮　公共図書館と学校図書館の役割—調布市立図書館における学校との協力事業　『学校図書館』 400:9－12，27－29，13－16，1984。

267）室伏武　情報処理能力としての図書館利用能力の教育—図書館利用者教育の比較研究『情報処理能力教育に関する比較研究報告書』亜細亜大学言語文化研究所，1984。

268）長澤雅男　生涯学習時代の図書館利用指導，近藤禧禔男　放送大学図書館運営と利用指導　『図書館雑誌』 79(4):190－192，202－204，1985。

B　利用者向け図書館

269）藤川正信『第二の知識の本』　新潮社　1963。

270）加藤秀俊『整理学』　中央公論社　1963。

271）有田恭助『情報の集め方』光文社　1964。

272）平山健三『知識の整理—科学者のために』　南江堂　1965。

273）三浦修『論文レポートの書き方』　実業之日本社　1965。

274）高橋達郎『科学文献』　南江堂　1966。
275）河野徳吉『情報検索の知識』　日本経済新聞社　1968。
276）佃實夫『文献探索学入門』　思想の科学社　1969。
277）梅棹忠夫『知的生活の技術』　岩波書店　1969。
278）川勝久『情報整理学』　ダイヤモンド社　1970。
279）前園主計『読書法』日本経済新聞社　1970。
280）大前正臣『情報選択の時代』　日本能率協会　1970。
281）須永一郎『情報入門』　経林書房　1970。
282）鵜沢昌和『人を使う人の情報管理学』　日本実業出版社　1970。
283）鵜沢昌和『身辺整理学』　日本経済新聞社　1970。
284）遠藤昭『情報整理の技術』　実業之日本社　1971。
285）橋本昌幸『情報検索のＡＢＣ』　日本放送出版協会　1971。
286）かいきよみち『やさしい情報整理学』　社会思想社　1971。
287）紀田順一郎『読書の整理学』　竹内書店　1971。
288）河野徳吉『情報整理学』　日本経済新聞社　1971。
289）佃実夫『ビジネスマンのための文献探索法』　文和書房　1971。
290）遠藤昭『情報の整理学』　実業之日本社　1972。
291）井上如『情報の読み方』　日本経済新聞社　1972。
292）川勝久『情報活用学』　ダイヤモンド社 1972。
293）紀田順一郎『現代人の読書術』　毎日新聞社　1972。
294）紀田順一郎『書物・情報・読書―知識整理と活用の技術』　出版ニュース社 1972。
295）荻昌朗『耳学問』　日本経済社　1972。
296）安川秋一郎『情報術入門』　ビクトリー出版　1972。
296）弥吉光長『百科事典の整理学』　竹内書店　1972。
298）板坂元『考える技術・書く技術』　講談社　1973。
299）かさはらよしろう『本とりえちゃん』　よしざきまさみ（え）（しゃかいの絵本）ポプラ社　1973。
300）佃実夫『知識の設計』　文和書房　1973。
301）梅棹忠夫『百科事典操従法』　平凡社　1973。
302）牛島悦子ほか『科学文献―まとめ方―さがし方―利用の仕方―』　南江堂 1973。
303）紀田順一郎『現代読書の技術』　柏書房 1975。
304）増田米二『情報の活用法』　彦業能率短期大学　1975。

文献リスト
304）岩崎隆治『情報収集力』　日本経営社団体連盟　1976。
306）島田隆司『便利でタダでトクするすぐ役立つ情報集』　広済社　1976。
307）斉藤孝『学術論文の技法』　日本エディタースクール　1977。
308）沢田昭夫『論文の書き方』　講談社　1977。
309）『情報の未来学：解釈と鑑賞別冊』3V　至文堂　1977。
310）小林矩子『図書館における調査と研究—大学生のための入門書』　蒼文社　1978，全訂版　1982。
311）渡辺茂『発想読書術』　ごま書房　1978。
312）井上如『身辺整理の心得』日本経済新聞社　1979。
313）石川弘義『情報網の作り方』　ごま書房　1979。
314）岩崎隆治『情報活用の心得』日本経済新聞社　1979。
315）服部一敏『辞書とつきあう法—早く引き，深く読み，楽しく遊ぶ—』ごま書房　1979。
316）杉原四郎ほか『研究レポートのすすめ』　有斐閣　1979。
316）吉野俊彦『サラリーマンの知的読書法』東洋経済新聞社　1979。
318）『サラリーマンの読書—本の違び方から整理術まで—』　実業之日本社　1979。
319）東政雄『技術者のための資料管理入門』　日本能率協会　1980。
320）加藤秀俊『加藤秀俊著作書Ⅰ』　中央公論社　1980。（整理学，自己表現，取材学）
321）丸山健二他『私の本の読み方・探し方』　ダイヤモンド社　1980。
322）紀田順一郎『図書館活用百科』　新潮社　1981。
323）前園主計『情報活用法—ビジネスマンの情報生活』　中央経済社　1981。
324）日本図書館研究会編『大学生と図書館』　日本図書館研究会　1981。
325）佐藤忠男『論文をどう書くか』　講談社　1981。
326）森崎震二・戸田あきら編『図書館活用学』　新日本出版社　1982。
327）立花隆『「知」のソフトウエアー情報のインプット＆アウトプット』　講談社　1984。
328）金沢工業大学ライブラリーセンター　サブジェクト・ライブラリアン『図書情報技術』　金沢工業大学出版局　1984。

(Recieved April 20, 1985)